『万葉集』から見る日本の古典 25

獨協大学特任教授　城崎　陽子

天武・持統朝 ―その2―

先回は天武天皇の政治体制が整い、それが持統朝へと引き継がれていく一方、天智朝を振り返るような時があったことを「近江荒都歌」を示しながら述べた。今回は、天武朝から持統朝への過渡期において謀反の罪を着せられて命を落とした大津皇子のことを取り上げる。

ここで、これまで扱ってきた壬申の乱から、天武・持統朝までの経緯を簡単に年表に示しておく。

天武一(六七二)
壬申の乱。
二(六七三)
二・二七
天武天皇、即位。
四・一四
大来皇女を伊勢神宮の斎宮に任命。
三(六七四)
一〇・九
大来皇女、伊勢神宮に向かう。
八(六七九)
五・六
天皇、吉野で皇后及び六皇子〔草壁・大津・高市・河島・忍壁・芝基〕と盟約。
一二(六八三)
二・一
大津皇子、初めて朝政を聴く。
一五(六八六)
七・二〇
朱鳥と改元。
九・九
天武天皇、崩。
九・二四
大津皇子、謀反を企てる。
一〇・二
謀反発覚。
一〇・三
訳語田の家で賜死。
一一・一六
大伯皇女、伊勢より帰る。
持統三(六八九)
四・一三
草壁皇子、薨。

大津皇子事件は、朱鳥元年（六八六）九月に天武天皇が崩御した直後と言ってよい時期に起きている。順に史料をみてみよう。

朱鳥元年の九月の戊戌の朔にして丙午に、天渟中原瀛真人天皇崩りましぬ。皇后、臨朝称制したまふ。

（『日本書紀』持統天皇称制前紀朱鳥元年〈六八六〉九月九日条）

『日本書紀』には朱鳥元年九月九日に天武天皇が崩御し、皇后が「臨朝称制」したとある。これは、次期天皇と目されていた皇太子・草壁（日並）皇子が即位するまでの臨時の措置で、皇后が政治を執り行ったことを示している。その代替わりの最中に大津皇子謀反事件が起こるのである。

冬十月の戊辰の朔にして己巳（二日）に、皇子大津の、謀反けむこと発覚れぬ。皇子大津を逮捕め、并せて皇子大津が為に詿誤かえたる直広肆八口朝臣音橿。小山下壱伎連博徳と、大舎人中臣朝臣臣麻呂、巨勢朝臣多益須、新羅沙門行心と帳内礪杵道作等、三十余人を捕む。庚午（三日）に、皇子大津を訳語田の舎に賜死む。時に年二十四なり。妃皇女山辺、髪を被して徒跣にして、奔り赴きて殉ぬ。見る者皆獻欷く。皇子大津は、天渟中原瀛真人天皇の第三子なり。容止墻く岸しくして、音辞俊れ朗なり。天命開別天皇の為に愛まれたまふ。長に及りて弁しくして才学有す。尤も文筆を愛みたまふ。詩賦の興、大津より始れり。丙申（二十九日）に、詔して曰はく、「皇子大津、謀反けむとす。詿誤かえたる吏民・帳内は已むこと得ず。今皇子大津、已に滅びぬ。従者、当に皇子大津に坐れるは、皆赦すべし。但し礪杵道作は伊豆に流せ」とのたまふ。又詔して曰はく、「新羅沙門行心、皇子大津謀反けむとするに与せれども、朕加法するに忍びず。飛騨国の伽藍に徒せ」とのたまふ。

（『日本書紀』持統天皇称制前紀朱鳥元年十月二日、三日条）

磐余池推定地（奈良県橿原市）

これをみると、十月二日に謀反が発覚し、翌三日に賜死しているから、素早い処刑といえよう。謀反の理由は示されていないが、『万葉集』に、当時伊勢斎宮であった姉・大来（大伯）皇女に会いに出かけた際の歌が残されているから、このことが直接の理由ともされている。

大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女の作らす歌二首

我が背子を
大和へ遣ると
さ夜ふけて
暁露に
我が立ち濡れし

（巻二・一〇五番歌）

二人行けど
行き過ぎ難き
秋山を
いかにか君が
ひとり越ゆらむ

（巻二・一〇六番歌）

題詞「竊かに」には、「悪事」であるという二ュアンスが込められているともされ、先に示した大津謀反の理由を裏付けるが、「愛しい弟を大和へ帰すといって、夜が更け、やがて明け方の露に濡れるまで私は立ち続けていた」という一首目と「二人でも越えがたい秋の山をどうやってあなたは一人でこえているだろう」という二首目には、姉の弟を案じる気持ちがあふれている。そして、大津皇子がいよいよ処刑されるという時に詠んだ歌が次である。

大津皇子、死を被りし時に、磐余の池の堤にして涙を流して作らす歌一首
百伝ふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

右、藤原宮の朱鳥元年の冬十月

（巻三・四一六番歌）

「磐余の池に鳴く鴨をみるのも今日を限りとして、私は雲の彼方に去るのだろうか」という一首には、ある種のあきらめがうかがえる。先に示した『日本書紀』の記事によれば、大津皇子は、容姿が優れ、発する言葉も明晰であり、「天命開別天皇」（天智天皇）に愛しまれた皇子であったことがわかる。また、詩文に優れ、「詩賦の興、大津より始れり」と称賛されるほどであったという。こうした経緯をたどっていくと、大津皇子の処刑が、次期天皇の即位を控えて企てられたことであったことは想像に難くない。

高尾山の昆虫 11 タテジマカミキリ

夏を謳歌した虫達もほとんどが秋には土に還ってしまい、厳冬を幼虫で過ごす種がほとんどです。

クワガタ等、成虫越冬する虫が少なからずいることは知られていますが、カミキリでも一部の種が該当します。

カクレミノ（隠簑）という特徴的な葉を持つ木はタテジマカミキリが付くことで知られ、夏季に木を揺すると本種が時に落ちて来ます。

ところがタテジマカミキリは成虫のまま冬季に見つかることで有名です。

朽木や土中に潜り込んで身を隠して冬を越す他種と違い、本種の場合はカクレミノの枝を削りそこに自分の体を密着させ枝に同化させるという妙技を使います。

触角を前方に目一杯伸ばし、枝にしがみつくような形でカムフラージュする様は、まさに芸術的でもあり、これでは天敵でも発見は容易ではありません。

まさに忍者の隠形の術とも言える見事さで、私も何回か探してみましたが、見つけるのは一苦労です。

この形のままで雨風を凌ぐにも大変だと思い、その胆力に感心することしきりです。

（撮影・文　松島　孝）